やまのさち

翠條サツキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
やまのさち

【Ｎコード】
Ｎ４３４７Ｓ

【作者名】
翠條サツキ

【あらすじ】
殺生丸の留守中に食べ物捜しをするりんと邪見。

（前書き）

殺りんが基本の「犬夜叉」のパロディです。ですが登場人物は「りん・邪見」だけです。

夏には燦々と降り注ぐ光を鮮やかな緑の葉で遮り心地よい木陰を作っていた木々は、吹き抜ける風が冷たさを増すにつれて黄色や茶色、赤といった暖かみのある色に変化していく。

今、りんと邪見が周囲に目を配りながら歩いている地面も足下が見えないぐらいにびっしりと生えていた雑草は姿を消し、丈の短い草や枝から落ちてきた針状の葉の合間に茶色い土が見える状態になっていた。

「寒くなってきたからか、なかなか見つからないね、邪見さま」

数歩先を歩いていたりんが覗き込んだ木の根元から顔を上げて言う。

「植物は一年中何かしら生えとる、お前の探し方が下手なだけだ。自分の飯なんだから、もっとしっかり探さんか」

「はーい」

邪見の厳しい口調を気にすることもなく、りんは素直に探し物を続ける。空振りの記録は一向に止まる気配が見えないが、それで落

ち込むようなりんではなかった。
がさがさと落ち葉を掻き分けるりんの小さな背中を見つめながら、邪見は大きなため息をついた。

『自分の食い物は自分でとってこい』

以前、殺生丸に言われた言葉に従い、今日もりんは遠ざかる白銀の背中を見えなくなるまで手を振って見送ると食べ物探しを始めた。
殺生丸がこの場に自分達を残していったということは、邪見達の力で回避できないような危険が発生する場所ではないことになる。しかし力を奮う間もなく目の前で奈落の分身、神楽にりんを誘拐されるという不名誉な過去がある邪見は、どんなに安全と思われる場所でもりんをひとりにするわけにはいかなかった。
偶然の事故でも、もしもりんの身に何かあったら明日の朝日が拝めなくなる。それだけは何としても避けなければならなかった。
そんなわけで、りんの食べ物探しに今日も邪見は同行していた。
殺生丸と別れた場所に阿吽を残し、森に入ってから、すでに一刻以上。
自分のためではない作業だから、やる気など元からなく渋々付き合っていた邪見だったが成果の上がらない今の状況にすっかり飽きていた。

（こんな手間がかかるのなら、畑荒らしの見張りをしている方がよっぽどマシじゃっ）

阿吽で近場の村へ行ってしまいたかったが、陽のあるうちは人目につきやすい。騒ぐ人間どもを静かにさせることなど雑作もないが、そうやって食べ物を得ることをりんが快く思わなかった。

口に出して非難することはないし、食べ物を差し出せば感謝の意を述べ、捨てるようなことはしない。しかし空腹に腹を鳴らしながらも食は進まず、結局ほとんどが無駄になる。

夜の畑荒らしとどこが違うのか邪見には分からなかったが、食べないのでは取ってきても意味がないし、残したことを申し訳なさそうに謝るりんを見るのも何となく嫌だった。

「面倒な生き物だ……」

ぽつりと呟くと、邪見はりんの後を追い掛けた。

＊　＊

「木の実でも落ちていればなぁ」

屈めていた腰を伸ばしながら、りんは頭上を見上げるが望むものは見当たらない。マツボックリならたくさん落ちているが、堅くてとても食べられそうにない。

（逆側を探した方が良かったのかな。でも邪見さま、反対しなかったし）

残してきた阿吽のいる方向に目をやると、くうとお腹が小さく鳴った。しかし帯に挟んだ袋は未だに空っぽだった。

一行の中で唯一の人間であるりんは日に三度は無理でも、何か口に入れておかなければならなかった。生きるためであったし、殺生丸達についていくためにも。

歩き疲れたりんに邪見は「阿吽に乗れ」と言ってくれるが、よほど足下が危ない場所でない限り、りんは自分の足で彼等についていきたかった。

だから自分からは絶対に弱音を吐かないりんだったが、なぜか我慢をしても殺生丸にはすぐにバレてしまう。

移動途中、前を歩く殺生丸が突然立ち止まる。休憩するのかと思えば、どこかに腰を下ろすでもなく歩みを止めたまま。そういう時はりんに阿吽に乗るように言っているのだと、短くない期間のうちに気付いた。

断ろうと思っても殺生丸の無言の指摘通り、体は重く視線は足下ばかりに向かい、大好きな白銀の背中を視界に捕らえることが出来ないほど疲れ果てている時だったから。

足手纏いになるまい迷惑をかけまいと思っても人間で、しかも子供であるりんには彼等よりも圧倒的に体力が不足していて思い通り

にはいかない。
結局、邪見の小言を聞きながら、殺生丸の意図を察して、りんが乗りやすいように傍らに体を低くして蹲る阿吽の背に跨がる。そして単調な揺れに、そのまま寝てしまうことが多かった。

（きちんとついていきたいのに）

彼等と共にあることを選んだのは、りん自身。望んだからには自分の力で、それを叶えなければならない。
そのためには小動物でも山菜でも茸でも何でもいいから、食べ物を見つける必要があった。

森に入って食べ物を探し始めて、もうずいぶんと時間が過ぎた。あとをついてくる邪見が手っ取り早く、どこかの村に行って食料を確保したいと思っているのは気付いていたが、りんはあまりそれはしたくなかった。
村人を無闇に驚かすのは良くないし、何よりも大好きな邪見や阿吽が気味悪そうに見られるのがりんは好きではなかった。
自分のために取ってきてくれた食べ物だと分かっていても、彼等がそんな目で見られたことが悲しくて食が進まない。そして食べられないことが申し訳なくて、さらに落ち込む。困らせるだけだと分

かっていても、どうしようもなかった。

「あったか？」

倒れた大木の影を覗き込んでいたりんの背後から邪見の声がかかる。

「ううん、ない。春とか夏はたくさん生えてるのにね」

つくし、うど、ぜんまい、わらび、たけのこ、かたくり、せり、ふき――と覚えている山菜の名前を指を折りながら順に上げていく。

「よう覚えとるな」

「だって、お山に入ってよく取ってたもん」

親兄弟を失ったりんは、自分の食べる物は自分で得なければならなかった。しかし与えられた田畑の実りは少なく、手許にはほとんど残らない。でも、それはりんに限ったことではなかった。

生簀の魚のおかげで畑仕事しかない村よりはマシだったかもしれないが、どこの家にも他人に施す余裕などなかった。食料も、気持ちも。

だから、ちょっとした仕事の合間や一日の作業が終わった後など、わずかな空き時間を見つけては近くの山へよく足を運んだ。

「見つからないと言うが、今の時期は茸が色々と生えているはずじゃ。お前が見落としておるだけではないのか」

りんの側に歩み寄ると、邪見は周囲に目を凝らした。
殺生丸のように鼻が利けば、草や地の下に隠れているモノもすぐに見つけられるだろうが、そんな能力を持たない邪見は知識と経験で補うしかない。

「うーん……」

大きな黄色の目をすぼめて探し物に集中する邪見の横で、目の上に手をかざしながら、りんも改めて辺りを見回す。
端から見ると祖父と孫のような微笑ましい光景は邪見の素頓狂な声で終わった。

「ん？　んん～」
「邪見さま？」

腰を屈めたままガサガサと落ち葉の間を進む邪見に、りんが首を傾げる。

「ほれ、そこにあるではないか」
「え、どこ？」

「ここじゃ、ここ」

邪見が人頭杖で落ち葉をひょいとずらすと、その下から茶色の傘に太い柄の茸が姿を現わした。

「うわ、本当だ。邪見さま、すごーい」

「それは焼くと上手い」

表面に出たせいで周囲にいい香りがふわりと広がり、りんが鼻をひくつかせる。そっと根元から刈り取り手渡せば、満面の笑みを浮かべて礼を言うりんに、邪見の機嫌はますます良くなる。

「ふっ。わしにかかれば、こんなもんじゃっ。大体、お前の目線は高すぎる。もう少し低いところから捜せ」

邪見の背はりんの肩ぐらいまでしかない。りんが少し腰を屈めれば同じ高さになるが、そのままでは視線の角度が違い、その結果ふたりの見えるものも変わってくる。

「分かった、やってみるね」

最初の収穫を袋にしまうと、りんは邪見の言葉に従い、地面に這いつくばるようにして茸探しを始めた。

「邪見さま、あったあった。さっきのと似てるけど白いのがあるよ」

助言が効を奏したのか、さほど間をおかずにりんから明るい呼び声がかかる。

「それも取っておけ」

手招きするりんが指差す場所に生えている茸は見覚えのあるやつだったので、収穫を指示する。

「これ、食べられるの？」
「食べられるから取れと言っておるのだ」
「だって、さっきみたいにいい匂いしないよ」
「あれは特別だ」

香りの良さで人間界に止まらず、妖怪の世界でも重宝されている、素人の自分達が見つけられたのは幸運としか言えない掘り出し物の

茸だ。
鼻の効く殺生丸には匂いが強すぎて合わないかもしれないが、少なくとも邪見はあれが大好きだった。

「すごーい、邪見さま。茸、見分けられるんだ」
「は？」

茸を片手に持ったりんから向けられる尊敬の眼差しは心地良かったが、言っている内容に邪見は耳を疑う。

「……お前、もしかして茸の見分け方を知らんのか？」

先ほどの茸の時に、りんは何も言わなかった。だからその価値が分からずとも、知っているものだとばかり邪見は思っていた。
そもそも茸は山での収穫物の代表選手だ。田畑の実りだけでは生活出来ない貧しい人間達にとっては、生きていくための基本的知識だろう。
屋敷の奥で守られる姫ではない、野山を駆け回るりんが知らないわけがない。
そんな邪見の考えを読んだかのように、りんが言った。

「さっきのは美味しそうな香りがしてたから食べられるものだと思ったの」

（！？　食えるかどうかを匂いだけで判断するなっ）

りんの呑気な答えに邪見の肝が一気に冷える。危険はないからと安心して目を離していたら、とんでもない事態になるところだった。

殺生丸がいない今、りんを監督するのは邪見の役目である。その間に何かあれば、外的要因だろうと、りん自身に原因があろうと、監督不行き届けで殺生丸からの処罰は免れない。

「りん、茸は少ししか分からないんだ。茸は食べられるものと毒のあるものがよく似てるから、間違えると大変だから、まだりんには早いって。もう少し大きくなったら教えてあげるよって……」

次第に声が小さくなり、言葉は最後まで紡がれなかった。しかし「誰が」などと問う必要はなかった。

りんが野盗によって家族を失ったのは本人から聞いて知っている。話さなかったとしても、この歳の子供がひとりで生活しているとなれば何があったかなど容易に想像がつく。

（思い出したか……）

力なく俯いた横顔に黒髪がかかり、りんの表情をうかがい知ることは出来ない。泣いてはいないようだったが、このままにしておくわけにもいかなかった。

うるさいほど喋り、不思議なぐらい笑う少女が静かなのは居心地が悪かったし、殺生丸が戻るまでにいつものりんに戻さなくては大

変なことになる。

「……だ、だがある程度は教わったのだろう」

今までの山狩りの収穫物に茸は何度か含まれていた。
それに傷付いた殺生丸に食べさせようとしたものの中に茸も含まれていた気がする。それ以外に魚やネズミ、トカゲを持っていったと言うから、一体あの方を何だと思っていたのだか。
怪我をしていたからとはいえ、いきなり水をかけたと聞いただけでも心臓が縮まったが、それから自分が迎えに行くまでの数日の出来事には言葉を失ったものだ。
知らないにしても限度がある。もし邪見がやっていたら、間違いなく命を落としていただろう。

「生きるだけの知識は貰った。それで良かろう」
「……うん」

小さな沈黙が気になったが顔を上げ、ぎこちないながらも笑顔を浮かべたりんに邪見はホッと胸を撫で下ろす。

「ほれ、それだけでは全然足りんだろう。どんどん探すぞ」
「うんっ」

先に立って歩き出した邪見の後ろに、慌ててりんが続く。背後か

ら聞こえる足音に邪見は肩の力をそっと抜いた。

「あ、ここにもあった。邪見さまっ」

一度コツを掴むと茸は面白いように見つかる。取ろうと屈み込んだ拍子に目に入った新しい茸にりんは邪見を大声で呼ぶ。

「んー、どれじゃ」
「これこれ」

りんの指差すものを見た邪見は顔を顰めると、ずいっとりんと茸の間に人頭杖を突き出した。

「邪見さま？」
「それは食えん」

傘の表面にかさぶた状のいぼがたくさんついた茸を邪見が不愉快そうに見つめる。

「少しなら問題ないが大量に食べると幻覚を見たり昏睡状態に陥る。しばらくすれば回復して死ぬことはないはずだが食べないに越したことはない」
「へえ」

さっきから食べるのに向かない茸は何度も見つけていたが、食べてはいけないとまで言われたのはこれが初めてだった。思わず傍らに座り込んで、まじまじと観察する。

「色々とあるんだね」

たくさんの茸を見れば見るほど、些細な違いで食べられるか食べられないかを見分けなければならないことが分かる。今より更に小さかったりんに母親が教えかったのは無理もない。せがまれるままに教えていたら、間違いなく事故が起きていただろう。

「ったく、さっきからお前が見つけるものといったら食えんものばかりではないか」

「そんなこと言ったって」

見分けがつくのなら邪見を呼ぶ必要はないが、知識の乏しいりんにはどの茸もただの茸でしかない。触っただけでどうにかなるようなものは少ないというが、それでも全部を同じ袋に入れるのは躊躇われる。

せっかく収穫した食べられるものまで無駄にしないためにも、りんは全てのものに邪見に判断を仰がなければならなかった。

「探し方が上手くなったせいもあるよ？」

見つける回数が多くなった分、当然はずれに当たる確率も高くなる。

「当たりを引かねば意味がなかろう」

もっともな邪見の言葉にりんは苦笑いを浮かべながら腰を上げると、ぐるりと周囲を見渡す。目をつぶり匂いを嗅いでみたが、人間のりんには森の匂いしか分からなかった。

「ああ、またはずれた」

倒木に生えている茸を見つけ、ドキドキしながら駆け寄ったりんは、間近で見たそれにがっくりと肩を落とした。淡い茶色の傘を持つ茸は、すでに邪見から「食べられない」と言われていたものだった。

「……煮ても焼いてもダメなのかな」

「腹を下したいのか、お前は」

諦め悪く呟くりんを呆れ顔で邪見が見上げる。

「それはヤだなぁ」

体調を崩した時の苦しみを思い出し、りんは顔をしかめた。

かつて空腹に耐えかねて食べた茸が毒茸だったことがあった。幸い命を落とすほど毒性の強いものではなかったが、丸二日あばら家で蹲っているしかなかった。

もちろん看病をする者などいない。畑仕事に姿を見せないことに気付き、不審がる者はいたかもしれないが見舞いに訪れるような者はひとりもいなかった。

やっと起きあがれるようになって、ふらつく体で外に出たりんを迎えたのは、仕事をさぼったという罵倒だけだった。説明するすべを持たないりんは、それを黙って受け入れるしかなかった。

それ以来、山で茸を見つけてもおっかあに教えてもらったもの以外は絶対に取らなかった。過って食べてしまった場合もなんとかなった昔とは違うことを思い知ったから。

りんが体調を崩した時、おっかあは少ない食料から暖かいお粥を作ってくれた。おとうは冷たい清水を汲んできてくれた。にいちゃん達はバカだなあと呆れた口調で言いながら、交代で側についていてくれた。

暖かくて優しい風景。

懐かしむものへと変わってしまった風景。

自分の側には誰もいない――嬉しいこと、悲しいことがあると、嫌になるぐらいそれを感じた。

（でも今は……）

「何を笑っとる、笑い事ではないぞ。……お前に何かあったら、わしが殺生丸さまにお叱りをうける」

自分でも気付かないうちに笑っていたりんに、人頭杖を振り回しながら邪見が口を尖らせる。それにこっと微笑みながら、りんは言う。

「大丈夫だよ。だって邪見さまが止めてくれるもん。だから、りんは全然平気だよ」

自信を持って、そう言える。

昔とは違うから。

殺生丸がいる。

邪見がいる。

おっかあみたいに伸ばした手を優しく握りしめたりはしてくれないけど、側にいるだけで心を暖かくしてくれる。見えなくても触れあわなくても、感じるものがある。

ふたりに出会ってから、数え上げたらキリがないほど沢山のことが変わった。彼等と共にある今なら、茸を間違えても笑い話に出来る。

「お前はこれからいつも、わしに食い物探しを手伝わせる気かっ」

冗談じゃない御免だ、と邪見は首を振って拒否する。

「じゃあ間違えないように、りんに教えて、邪見さま」

じりじりと後退していた邪見の足が、その言葉でぴたりと止まる。

「教えて、邪見さま」

見上げてくる大きな黄色の目を真直ぐ見つめて、もう一度繰り返す。それに邪見はぱくぱくと数回口を動かした後、くるりと背を向けた。

「お前は面倒なことばかり言いおって。……一度しか言わんから、しっかり覚えろよ」

「うん。ありがとう、邪見さまっ」

素っ気ない邪見の態度にもりんの笑顔は崩れない。

もし断られていても、きっと笑っていた。口では文句を言いながらも、自分の言葉をきちんと聞いて答えてくれる邪見が、ただりんは嬉しかった。

今でも夢に見る。
あの夜を思い出し、泣きながら目覚める。
今でも夢を見る。
楽しい一時を思い出し、目覚めて涙が零れる。
なくしたこと、なくなったもので心が張り裂けそうになる。
でも、いつの間にか笑っている自分がいる。
今の自分には苦しみ以外のものがある。
一見しただけでは分かりづらくて、まるで山の幸みたいだけど。
でも、ないわけではない。
気付ば、そこにはある。
たくさんのさちで溢れている。

（後書き）

旧サイト　２００４．１１．２９ＵＰ分を加筆修正

こんな時期なので明るいものをアップしたかったのですが「亀甲天神」にはいいのがなくて「犬夜叉」から引っ張り出して来ました。こちらも明るいとは言い難い内容ですが・・・一応「幸」がテーマなので。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4347s/

やまのさち

2011年10月8日11時58分発行